

O C Gのカードでラッシュデュエルやってみた。

サイアー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りです。

注)

■特殊召喚はあまりしません。

■エクストラデッキも使いません。

■ソリティアも多分しません。

■作者は持っているカード以外あまり知りませんので変なカード使っている、何も言わないでください。

それでもいいというかたはどうぞ。

目次

OCGのカードでラッシュデュエルやってみた。	1
2体の竜対機械仕掛けの竜	8
悪魔対光子竜	15
光のロードを突き進め	23
習得せよ儀式召喚!!サイバースマジシャン登場!!	31
デュエル・アカデミア 伝説の巨人	40
弱さは罪!?!奪われたカードを奪還せよ!!	48

OCGのカードでラッシュデュエルやってみた。

■ソリティアはあまりしません。

■特殊召喚もあまりしません。

■エクストラデッキも使いません。

それでもいいという人は見てください。

俺口調の少年 ライフ8000

手札4

僕口調の少年 ライフ8000

手札4

「俺のターンドロロー。俺はサイバースウィザードを召喚。俺はこれでターンエンド。」

サイバース・ウィザード

レベル4

サイバース族／効果

攻撃1800

白一式の服装で未来的な格好をした少年があらわれた。

「手札事故かな？僕のターンドロロー。僕はイグザリオン・ユニバースと復讐の女戦士ローズを召喚。」

イグザリオン・ユニバース

レベル4

獣戦士族／効果

攻撃1800

復讐の女戦士ローズ

レベル4

戦士族

攻撃1600

いきなり二体のモンスターが現れた。

バトルフェイズ

「僕は魔法カード鈍重を発動。対象はサイバース・ウィザード。」

サイバース・ウィザード

攻撃1800—800∥1000

サイバース・ウィザードが重力のようなものを受けて攻撃力が下がった。

「行け！イグザリオン・ユニバースでサイバース・ウィザードを攻撃。」
「不味い！」

サイバース・ウィザードにイグザリオン・ユニバースが体当たりをし、そのままプレイヤーに突撃した。

サイバース・ウィザードを破壊。

ライフ8000—800∥7200

「いてて、でもまだまだ。」

「更にローズでダイレクトアタック。ローズは戦闘ダメージを与えた時さらに300のダメージを与える。」

ローズも体当たりをしてきて、ついでのという感じで持っていた剣を投げつけてきた。

「……」

ライフ7200—1600—300∥5300

「メイン2カードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターンドロ、俺はビットロンを2体召喚。そして、ビットロン2体をリリースして現れる銀河眼の光子竜（ギヤラクシーアイズ・フオトン・ドラゴン）をアドバンス召喚。」

ビットロン

レベル2

サイバース族／通常

攻撃力200

銀河眼の光子竜

レベル8

ドラゴン族／効果

攻撃3000

現れたのは1体の竜その眼には銀河が写っていた。

バトルフェイズ

「行け！フォトン・ドラゴン、女戦士ローズを攻撃。破滅のフォトン・ストリーム!!」

「ギャー!!」

復讐の女戦士ローズ破壊。

3000—1600||1400のダメージ

8000—1400||6600

「俺はこれでターンエンド。」

「僕のターンドロ。!!きたよ！僕のエースモンスター。」

「何!？」

「僕は、聖杯に誘われし者とカードガンナーを召喚そして、この2体をリリースして現れよ機械の体を得た、ドラゴン、クラッキングドラゴン!!」

旅人風の男とゲーセンの機械みたいなモンスターが現れたかと思うとその上からその二体を踏み潰して機械仕掛けのドラゴンが現れた。

聖杯に誘われし者

レベル4

戦士族／通常

攻撃1800

カードガンナー

レベル3

機械族／効果

攻撃4000

クラッキングドラゴン

レベル8

機械族／効果

攻撃3000

「やっかいだな。」

クラッキング・ドラゴンはモンスターを出す度にそのモンスターの攻撃力をそのモンスターのレベル×200下げその数値分相手にダメージを与える効果がある。

バトルフェイズ

「クラッキング・ドラゴンでフォトン・ドラゴンを攻撃。してもフォトン・ドラゴンの効果で除外されてしまうからね。僕はこれでターンエンド。」

「こうなったらやけくそだ。俺のターンドロー!!俺は団結の力をフォトン・ドラゴンに装備。このカードは装備モンスターの攻撃力を自分の場のモンスター×800上げる。場にいるのはフォトン・ドラゴンのみよって攻撃力は3800となる。」

フォトン・ドラゴン

攻撃3000+800=3800

アタックフェイズ

「フォトン・ドラゴンでクラッキング・ドラゴンを攻撃。」

「クラッキング・ドラゴンはこのモンスターのレベル以下のモンスターには破壊されない。」

「だがダメージは受ける。」

3800—3000=800

8000—800=7200

「俺はこれでターンエンド。」

「僕のターンドロロー、僕はカードを1枚伏せてサブマリノイドを召喚。そしてサブマリノイドに伏せていた装備魔法デーモンの斧を装備する。これによりサブマリノイドの攻撃力は1000上がる。」

サブマリノイド

レベル4

機械族／効果

攻撃力800

マリノイド

800+1000=1800

バトルフェイズ

「行け！サブマリノイドプレイヤーにダイレクトアタック。」

ライフ8000-1800=6200

「僕はこれでターンエンド。(さっき伏せたカードは聖なるバリアミラーフォース。仮にこの状況を覆されてもこのカードで何とかかな。)」

「俺のターンドロロー、魔法カードサイクロンを発動。俺は真ん中の伏せカードを破壊するぜ。」

「ミラーフォースが破壊された！」

ミラフォは割られるかなり有名な話だ。

「俺はランチャー・コマンダーを召喚。」

ランチャー・コマンダー

レベル4

サイバース族

攻撃1700

何か物騒なモンスターが現れた。

「クラツキング・ドラゴンの効果発動。召喚、特殊召喚
されたモンスターの効果発動。」

サイバース・コマンダー

攻撃力1700—800∥900

ライフ6200—800∥5400

「俺はサイバース・コマンダーの効果発動。このカードをリリースしてクラツキング・ドラゴンを破壊する。」

「え!？」

クラツキング・ドラゴン破壊

「俺は更に、クラインアント、ライドロンを召喚。更にクライアントの効果自分の場のサイバース族の攻撃力を500あげる。更に場のモンスターの数が増えたのでフォトン・ドラゴンの攻撃力も上がる。」

機械仕掛けのアリと獅子が現れた。

こんなの有りか？

クラインアント

レベル3

サイバース族

攻撃力1500↓2000

ライドロン

レベル4

サイバース族

攻撃力2000↓2500

銀河眼の光子竜

攻撃力3000+800×3∥5400

バトルフェイズ

「クラインアントでマリンロイドを攻撃。」

サブマリンロイド破壊

「フォトン・ドラゴンとライドロンでプレイヤーにダイレクトアタック。」

6200—5400—2500=0

勝者 俺口調の男

2体の竜対機械仕掛けの竜

『デュエル終了。感想を後日提出せよ。』

「いやー、やってやったぜ！」

「負けたよ。まさかクラッキング・ドラゴンがあんな簡単に破壊されるとはね。」

デュエルが終わり二人の男性が感想を言い合っていた。勝った方はデュエルアカデミアに通う男子高校生1年生の佐藤 遊光（さとう ゆうこう）

負けた方は遊海 達也（ゆうかい たつや）同じくデュエルアカデミアの1年生だ。

「にしても面白いな。ラッシュデュエル。通常召喚何回も出来るから光子竜が簡単に出せるな。」

「そうだね僕もクラッキング・ドラゴンがこのルールだととても頼りになるね。」

今日はラッシュデュエルの実習だ。

このデュエルアカデミアではOCGのカードでラッシュデュエルをしていこうという珍しい学校なのだ。

「いやあれはかなり強い。」

「まあね。」

そう、このルールだとOCGよりも簡単にクラッキング・ドラゴンを出せるようになったので。

「達也君ちよつとこつち来てくれない。」

達也が困った様子の先生に呼ばれた。

「はい、なんですか？」

「実は今日生徒が一人休んでしまっただね。すまないけどもう一戦いいかい？」

「いいですよ。じゃあ遊光、またあとでね。」

「おうまたな。」

先生に呼ばれデュエルスペースにつくと一人の女子生徒がいた。

「おんたが対戦相手？遅すぎなんじゃないの？」

「いいや、僕は代わりだよ。僕はもう一回デュエルをしているからね。」

「あっそうなの、それはごめんなさい。」

「いやいいよ。気にしてないから。」

「それで手加減はしないわ。」

「それは僕もだよ。」

「あ、自己紹介をするのを忘れてたわね。私の名前は佐藤 京子(さと う きょうこ)よ、よろしく。」

「僕の名前は遊海 達也(とろし)よ、よろしく。」

お互いに緊迫感を感じていると二人が同時に

「デュエル!!」

「私のターンドロロー、霊廟の守護者を召喚そして霊廟の守護者はモンスター2体をリリース素材に出来る霊廟の守護者をリリースして真紅眼の黒龍(レッドアイズ・ブラック・ドラゴン)をアドバンス召喚。」

霊廟の守護者

守備力2100

真紅眼の黒龍

レベル7

攻撃2400

通常のデュエルだと通常召喚が1回なので霊廟の守護者は使わずらいののだがラッシュデュエルだと強力なリリース要因となった。

「いきなり最上級モンスター!!」

「それだけじゃない。私は更に霊廟の守護者をもう一体を召喚。そのまま2体分リリースして、青眼の白龍(ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン)を召喚。」

黒い竜が現れたあと隣にデュエルモンスターの中でも有名なドラ

ゴンが、2体並び立った。

青眼の白龍

レベル8

攻撃3000

黒い竜と白い竜の二体が並び立つ。

その威圧がフィールドを包み込んだ。

「ブルーアイズとレッドアイズが並ぶことなんて中々見ない光景だよな。」

「まあね。更に私は黒炎談を発動。レッドアイズの攻撃力つまり2400のダメージを相手に与える。」

黒い竜が口から炎の塊を勇騎に向かって放った。

「いきなり!!」

達也残りライフ

8000—2400||5600

「私はこれでターンエンド。」

このターンで手札が0枚になったが次のターンでまた5枚ドロ―出来るのだから問題はない。

「僕のターンドロ―、カードを2枚伏せて僕はハック・ワームと速攻のかかしを出してその2体をリリースして現れるクラッキング・ドラゴンをアドバンス召喚。」

ハック・ワーム

レベル1

攻撃400

速攻のかかし

レベル1

攻撃0

クラッキング・ドラゴン

攻撃3000

前の話でも出てきた機械仕掛けの竜。

「あんたもドラゴン使いつてそれ機械族じゃないの!？」

「そうだけどそれがどうかしたの？」

「私はドラゴンが大好きなのよ。そんな偽物の竜は私は認めないはスクラップにしてやるわ。」

「そうするとスクラップ・ドラゴンになりそうだね。」

「それも機械族じゃないの。もう容赦しないわ、覚悟しなさい。」

「お好きにどうぞ。」

バトルフェイズ

「それじゃあクラッキング・ドラゴンでレッドアイズを攻撃。」

「カウンタートラップ発動、攻撃の無力化。攻撃を無効にするわ。」

「ターンエンド。」

「私のターンドロロー、ははは、やっぱりデュエルモンスターズ最強はドラゴン族ね。魔法カードサイクロンを発動。あんたの真ん中の伏せカードを破壊するわ。」

「ドラゴン関係ないと思うけど。」

「そうね。魔法カード、封じられし聖槍を発動。これによりあんたのクラッキング・ドラゴン攻撃力を800下げる。これであんたの相棒はレッドアイズすら勝てないもう私の勝ち確定ね。」

「だからドラゴン関係無いじゃん。」

クラッキング・ドラゴン

攻撃力3000→800||2200

「まだよ魔法カード一騎加勢、ブルーアイズの攻撃力を1500上げるわ。」

青眼の白龍

攻撃3000→4500

バトルフェイズ

「行きなさいブルーアイズでクラッキング・ドラゴンを攻撃。」

青眼の白龍

攻撃力4500

「トラップ発動。魔法の筒、効果ブルーアイズの攻撃を無効にしてブルーアイズの攻撃力分相手にダメージを与える。」

「え、そんなー!」

ライフ8000—4500≡3500

「これが僕の戦術だよ。相手の展開や攻撃を利用してダメージを与える戦術だよ。」

「くっ、でもまだよ。まだ私にはレッドアイズがいるレッドアイズでクラッキング・ドラゴンを攻撃。」

そう前の話ではあまりうまく回らなかったが本来このデッキはクラッキング・ドラゴンや魔法の筒などのバーン戦術を得意としたデッキだったのだ。

クラッキング・ドラゴン対真紅眼の黒龍

2400—2200≡200ダメージ

達也

残りライフ

5600—200≡5400

「だけどクラッキング・ドラゴンは自分以下のレベルのモンスターには戦闘では破壊されない。」

「何よそれ!ターンエンドよ。」

「僕のターンドロ、カードを1枚伏せる、そしてジャック・ワイバーンを召喚。」

ジャック・ワイバーン

レベル4

攻撃1800

小さいクラッキング・ドラゴンが現れた。

「また機械族、あんたどれだけ偽物のドラゴンを出せばきかますむのよ。」

「満足するまでだ。魔法カードリミッター解除を発動。」

「り、リミッター解除!?!」

リミッター解除、それは機械族のデッキ最強の魔法カードその効果

は自分の場の機械族の攻撃を倍にするという能力だ。

クラッキング・ドラゴン

攻撃3000↓6000

ジャック・ワイバーン

攻撃1800↓3600

バドルフェイズ

「クラッキング・ドラゴンでブルーアイズを攻撃。」

6000—3000∥3000

ライフ3500—3000∥500

青眼の白龍破壊

「ブルーアイズが破壊された。それでも墓地の霊廟の守護者の効果発動。場のドラゴン族が破壊された時に発動できる。墓地のこのカードを特殊召喚することが出来る。そして破壊されたモンスターが通常モンスターなら手札に戻す。青眼の白龍を手札に戻すわ。…でもあまり意味は無いわね。」

霊廟の守護者

守備力2100

「ジャック・ワイバーンでレッドアイズを攻撃。」

ジャック・ワイバーン対真紅眼の黒龍

3600—2400∥1400ダメージ

ライフ500—1400∥—900

勝者 遊海 達也

「負けたわ、ラッシュデュエルでのデュエルっていうのも中々面白いわね。」

「まあ僕も楽しかったよありがとう。」

「ごちそうさ。」

硬い握手を結んだ。

「おおう男の友情みたいだな。」

近くで見えていた遊光がそんなことを言ったら、

「わ、私はれつきとした女子よ。」

「いや、わかってるよ。」

「ほんとに分かったんでしょねって、あんた遊光じゃない。はやくドラゴンデッキ組みなさいよ。」

「いやだよ。」

「知り合い？」

「まあな。俺が光子竜を持っていたからな。あいつかなりのドラゴン好きだからな。」

あれは入学式をしてすぐの話だ。

遊光が近くのカードショップでデュエルをした時、銀河眼の光子竜を呼び出したら以上な反応をしてからたまに会うときに話をするようになったのだ。

「いい加減サイバー族じゃなくて別のデッキ作りなさいよ。」

「まあそのうちな。」

「そう言って作らなかつたじゃないの。」

「まあまあとりあえず落ち着いて。」

お互いにヒートアップしていたところを達也がなだめる。

数分後

「だとしても今のところエクストラデッキ無しでサイバー族はきついわよ。」

「そうだなあ。これからカードショップ行って何かないか探してみるか。」

「じゃあ僕もいくよ。」

「私も行くわよ。どうせ暇だし。」

悪魔対光子竜

「さあ、きたわよ。さっそく新しいデッキをくもうじゃないの。」
「いいカードがあったらな。」

カードショップに来たのだが、遊光はあまり期待していない。何せ本来はOCGで成り立つカードが多いのが普通だ。しかも最近のカードはかなり展開力があまりいらぬルールなのでデッキに入るカードは大分異なるのだ。

「あ、これなんてどう？ぶつかり合う魂！これとパワーコード・トーカーと合わせれば結構強いと思うわ。」

「リンクモンスター使えないから無理。」

「あ、そうだった。」

「まだルールに馴れて無いんだろ。」

「まだって、2週間たってんだよ。馴れて無いじゃすまないぞ。」

「くっ、バレちゃったかーアハハ。冗談だよ、冗談。」

「(ぜってー冗談じゃないだろ。)」

数分後

ラッシュデュエルで使えるようなカードを何枚か探してみると以外と何枚かあった。

「探してみるものだな。」

「そうだね。」

買ったカードをデッキを組み直していると、

「やあ君達、近くのデュエルアカデミアの生徒さん達だよね。」

いきなり後ろから声をかけられた。

急いで振り向くとそこにはこのお店のエプロンを着た少し高い身長の30代後半っぽい男性がいた。

「は、はい。あなたは？」

「ああ自己紹介をしていなかっただね。私はこのお店の店長だよ。ちよつとその君ちよつと頼みたいことがあるんだけどいいかな？」

店長を名乗る人が遊光に何か頼みたいことがあるようだ。別に断る理由は無い遊光は、

「え、ええといいですよ。」

「すまないねえ、新しいデュエルコートの試運転したくてねえ一人じゃできないから是非とも強力で欲しかったんだよ。」

「ということは対戦は店長さんですか？」

「いや、私は機械の監視だよ。君とデュエルしてもらうのはうちのバイトの一人だよ。あ、そこにいる子ね。おーい柏木くん。あれやるからお願い。」

「分かりました店長。ルールはラッシュデュエルでしたよね。」

「そうだよ。お願いね。」

「分かりました。あ、君が対戦相手かな。その制服は1年か。俺は、柏木 勝（かしわぎ しょう）。君達と同じ学校の一つ上の先輩だよ。」

「よろしく願います。」

デュエルフィールドのシステムを起動させて対戦相手と向き合い、声を揃えて、

二人「デュエル!!」

遊光

ライフ8000

勝

ライフ8000

「俺のターンドロロー俺はサイバースウィザードとRAMクラウドを召喚してそのまま2体をリリースして銀河の目の光子竜とアドバンス召喚。カードを1枚伏せてターンエンド。」

サイバースウィザード

レベル4

サイバース族

攻撃1800

RAMクラウダー

レベル4

サイバース族

攻撃1800

銀河の目の光子竜

レベル8

ドラゴン族

攻撃3000

「光子竜か、しかもサイバースと混ぜているのか、珍しいデツキを使うんだな。俺のターンドロロー、俺はにトーチ・ゴーレムを相手フィールドに特殊召喚してこちらの場にトークンを2体特殊召喚する。」

トーチ・ゴーレム

レベル8

悪魔族

攻撃3000

トーチトークン

レベル1

悪魔族

攻撃0

「トーチ・ゴーレム？なんで相手フィールドに攻撃力3000のモンスターを特殊召喚!?!」

「なんでだ？リンク召喚は使えないのにトーチ・ゴーレムを使っている一体どうして。」

「バトル行け、トーチトークンでトーチ・ゴーレムを攻撃。」

「攻撃力0のモンスターで攻撃力3000のトーチ・ゴーレムを攻撃

!?何をするつもり?」

トーチトークンがトーチ・ゴーレムに突撃すると、トーチ・ゴーレムが拳で対抗してトーチトークンが破壊された。

トーチトークン対トーチ・ゴーレム

攻撃0 対攻撃3000

3000-0=3000のダメージ

「ぐはあ。だがこれで発動条件は整った。速攻魔法、ヘルテンペスト発動。これによりお互いのデッキのモンスターは全て除外だ!」

残りライフ5000

「へ、ヘルテンペスト!」

ヘルテンペスト

それはいくつものコンボデッキで使われてきたコンボカード。その発動条件の高さからあまり使われていないカードだがその能力はすさまじくお互いのデッキと墓地のモンスターを全て除外するというものだ。

遊光と勝のデッキと墓地のカードが光ったかと思うとモンスターカードが飛び出てフィールドの中央に向かっていった。

「俺のデッキが。」

遊光 残りデッキ残り15枚

「大丈夫だよデュエルが終わったら演出では消えたけどデュエルが終わったら戻ってくるから。俺はこれでターンエンド。さあどこからでもかかってくるがいい。」

勝 残りデッキ20枚 残りライフ5000

「ヤバいかもね。デッキのモンスターが無いってことはモンスターを何度も召喚できるラッシュデュエルでモンスターを出せないのはかなりの痛手だね。」

「感心してるんじゃないのよ。て言うかとんでもないデツキね。相手に何もさせる気が無いんじゃないの?」

「そうだね。彼はこのシヨップのバイトの中でもかなりの実力者だよ。さあてこれをどう返して来るのか楽しみだよ。」

外野は冷静に戦況を把握していたのだった。

「俺のターンドロー!!俺は、ビットロンを召喚。そのままバトルビットロンでトークンに攻撃。」

ビットロン

レベル2

攻撃 1500

ビットロン対トーチトークン

攻撃1500 攻撃0

1500—0||1500のダメージ

「破壊される。だがそれだけでは俺は倒せないぞ。」

残りライフ3500

「俺は、光子竜でダイレクトアタック!!」

「ぐはぁー」

残りライフ500

「トーチゴーレムで止めだ!」

「トラップ発動。ドレインシールド攻撃を無効にしてトーチゴーレムの攻撃力分回復する。」

残りライフ3500

「俺は、これでターンエンド。」

残りライフ8000

「俺のターンドロロー、俺は、お前の場の光子竜とビットロンをリリースして溶岩魔神 ラヴァ・ゴーレムを特殊召喚！」

「しまったー！」

光子竜とビットロンの上から溶岩が落ちてきてそのまま2体を飲み込んで1体の巨大なモンスターになった。

「更に俺は、魔法カード所有者の印これによりお前の場のトーチ・ゴーレムとラヴァ・ゴーレムは俺の元に戻ってくる。」

「何!?!」

さつきまで遊光の場にいた2体のゴーレムが謎の印を見ると勝の場に戻っていく。

「バトル、いけラヴァ・ゴーレムとトーチ・ゴーレム一斉攻撃！」

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム

攻撃3000

トーチ・ゴーレム

攻撃3000

8000—3000—3000=2000

「ぐはあー！」

残りライフ2000

「俺は、これでターンエンド。越えられるか?この壁を。」

「攻撃力3000が2体ね。」

「まだ余裕じゃない。サンダーボルトとか使えば逆転できるわよ。」

「そんな都合よく引けてるわけないだろ。制限カードだろあれ。」

「だったら攻撃力で突破すれば」

「遊光のデッキには3000を超えるモンスターは入ってないよ。」

「じゃあ積みなんじやあないの?」

「いいや、よく見てなよ。これから大逆転するから」

「仲間の勝利を信じて戦う、イヤー青春だね。」

「越えてみせますよ。俺のターンドロ、俺は死者蘇生を発動。墓地からよみがえろービットロン！」

ビットロン

攻撃1500

「ここでビットロン光子竜じゃなくていいのか？」

「ええ大丈夫ですよ。バトル入るときに更に魔法カード」

「えつと何でそんなカードを？」

「ビットロンでトーチ・ゴーレムを攻撃。」

「攻撃力の低いトーチ・ゴーレムで攻撃だ?!」

「ダメステいいですか？」

「え？オネストはありえないし、え、何？ど、どうぞ。」

「俺は、速攻魔法 Ai 打ちを発動。」

「Ai 打ち？」

「Ai 打ちとはまさしくお互いのモンスターの攻撃力を同じにして相討ちさせる。そしてお互いにそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。」

「はい!？」

ビットロンにトーチ・ゴーレムが殴ろうとするとビットロンが大爆発してトーチ・ゴーレムも巻き込まれた。

「グハァー!!」

勝残りライフ500

「俺はこれでターンエンド。これで俺の勝ちだ。」

遊光残りライフ500

「え、遊光それってどういうこと？」

京子がどういふことか分からずにいたが、その以外のメンバーは理解していた。

「ラヴァ・ゴーレムはスタンバイフェイズに1000のダメージを受ける。よって俺の敗けだ。」

ライフ0

「ありがとうおかげでこのデツキの弱点を改めて確認することが出来たよ。」

「いえ、こちらこそ。楽しかったです。」

「にしてもAi打ちか、驚いたよあれは@イグニスター専用カードだと思っていたよ。」

「ありがとういいデータがとれたよ。お礼に君達にカードをあげよう。」

「いいんですか、店長！」

「君には何も無いよ。」

「それはないっすよ、店長。」

「アハハハ」

光のロードを突き進め

「本日もラツシユデュエルの研修を行う。今回も、レポート提出してもらうからな。それでは始め!!」

先生の号令から始まった今回の授業前にもあったラツシユデュエルの実習だ。学校でデュエルを楽しめるからいいのだけど。

さてここで一つの問題が発生している。それは、

「(どうしよう僕は人見知りなんだよ。)」

そうなのだ、遊海は普段はこういう授業では遊光と組んでデュエルをしているのだが、今日は、京子と一緒にデュエルをしに行つてしまった。

「あのーデュエルの相手います?」

遊海が一人でどうしようか悩んでいると後ろから女子生徒に声をかけられた。

「え、あ、はい、大丈夫ですよ。」

「あ、じゃあ私とやりませんか?」

「いいですよ。僕の名前は遊海 達也です。」

「私は佐藤 麻衣です。それでは始めましょう。」

「決闘!!」

「私のターンドロー、私は手札からライトロード・アサシン ライデン、ライトロード・マジシャン ライラを召喚します。」

ライトロード・アサシン ライデン

レベル4

攻撃力1700

ライトロード・マジシャン ライラ

レベル4

攻撃力1700

「私はフィールド魔法ジャススイスワールドを発動します。このカードは私のデッキからカードが墓地に送られる度にシャインカウントーが1つ乗っかり、1つにつき攻撃力+100上げます。」

フィールドに立派な神殿が現れた

「更にライデンの効果デッキ2枚を墓地に送りその中にモンスターがあれば攻撃力を200上げる。カードが墓地に送られたことでシャインカウンターが1つ乗ります。それによって私の場の「ライトロード」と名のついたモンスターの攻撃力が100上がる。」

墓地に送られたカード

ソーラー・エクステンション

ライトロード・ハンター ライコウ

ジャステイスワールド

シャインカウンター

0↓1

ライトロード・アサシン ライデン

攻撃力1700↓2000

ライトロード・マジシャン ライラ

攻撃力1700↓1800

「ターン終了時、ライラの効果デッキの上から2枚、ライデンの効果デッキから3枚を墓地に送る。カードが2回墓地に送られたことによりシャインカウンターが2つ乗るね。」

墓地に送られたカード

裁きの龍

ライトロード・エンジェル ケルビム

ジャステイスワールド

ライトロード・モンク エイリン

底なし落とし穴

ジャステイスワールド

シャインカウンター

1↓2↓3

ライトロード・アサシン ライデン

攻撃力2000↓1800↓1900↓2000

ライトロード・マジシャン ライラ

攻撃力1800↓1900↓2000

「時間をかければ攻撃力がとんでもなくなるな。」僕のターンドロ―僕はカードガンナー、ツインバレル・ドラゴンを召喚、ツインバレルの効果、コイントスを2回行い、2回とも表なら相手のカード1枚破壊。対処はジャステイスワールドを選択するよ。」

コイントス結果

1回目 表

2回目 裏

ガチャガチャのようなモンスターと鼻と口が銃のようになってい
るモンスターが現れた。

「ハズレちゃいましたね。」

「まあ、想定範囲内だよ。カードガンナーの効果デッキの上から3
枚を墓地に送り、攻撃力を1500上げる。」

墓地に送られたカード

機皇帝 ワイゼル∞

サイバーフェニックス

重力砲

「そして2体リリースしてクラッキング・ドラゴンをアドバンス召
喚。」

フィールドの2体を犠牲にして機械仕掛けの竜が現れた。

バトルフェイズ

「行け!!クラッキング・ドラゴンをライデンを攻撃。」

クラッキング・ドラゴン対ライトロード・アサシン・ライデン

攻撃力3000―2000∥1000ダメージ

8000―1000∥7000

「ターンエンド。」

「私のターンドロロー私は手札からソーラー・エクステンジを発動。手札のライトロード・サモナー ルミナスを捨てて2枚ドロローその後デッキから2枚を墓地に。ジャステイスワールドの効果で更に攻撃力を増加。更にシャインカウンターが1つ乗る」

墓地に送られたカード

ライトロード・ドラゴン グラニス

貪欲なツボ

ジャステイスワールド

シャインカウンター

3↓4

「(来た!) 私は永続魔法ライトロードの神域を発動。手札のジャステイスワールドを捨ててライトロード・ドラゴン・グラゴニスを手札にくわえる。更にライトロード・マジシャン・ライラを生贄にライトロード・ドラゴン・グラゴニスをアドバンス召喚。」

ライトロード・ドラゴン グラゴニス

レベル6

攻撃力2000

「レベル6で攻撃力2000?低くない。」

「そう思う?」

ライトロード・ドラゴン グラゴニスは墓地のライトロードの種類×300上がる。更にジャステイスワールドのシャインカウンターは4つよって攻撃力は400上げるわ。」

ライトロード・ドラゴン グラゴニス

攻撃力2000↓3800↓4200

「攻撃力は高いんだけどクラッキング・ドラゴンの効果、相手のフィールドに召喚されたモンスターレベル×200攻撃力を下げその数値分相手にダメージを与える。」

ライトロード・ドラゴン グラニス

攻撃力4200↓3000

残りライフ7000↓5800

「だったら装備魔法デーモンの斧をグラゴニスに装備これによりグラ

ゴニス of 攻撃力は1000上がりクラッキング・ドラゴンを超えたよ。」

ライトロード・ドラゴン グラゴニス

攻撃力3000↓4000

バトルフェイズ

「グラゴニスでクラッキング・ドラゴンを攻撃。」

ライトロード・ドラゴン グラゴニス対クラッキング・ドラゴン

4000—3000=1000ダメージ

残りライフ8000↓7000

「ターン終了時グラゴニスの効果デッキから3枚を墓地に。」

墓地に送られたカード

ライトロード・スピリット シャイア

ライトロードの神域

聖なるバリアミラーフォース

「墓地に送られたカードの中にライトロードがあり攻撃力が300更にジャステイスワールドにシャインカウンターが乗ったことで更に攻撃力増加。」

ジャステイスワールド

シャインカウンター

4↓5

ライトロード・ドラゴン グラゴニス

攻撃力4000↓4300↓4400

「僕のターンドロ。僕は手札から魔法カードカップ・オブ・エースを発動。君か僕のどちらかの手札を増やすよ。」

「それって実質デメリットが無いですよ。ラッシュデュエルだと。」

そうなのだこのカップ・オブ・エースはコイントスをして表だったら発動したプレイヤーが裏だったら相手が2枚ドロするカードなのだがこのカード何とラッシュデュエルだとデメリットがないのだ。次のターンになれば相手は5枚になるようドロする。よってド

ローしたとしても次のターンのドローで5枚になるので意味が無いのだ。

コイントス結果

裏

「コイントスは裏か。君が2枚引きな。」

「ええ。ドロー。」

「カードを2枚伏せて、僕は更に装備魔法重力砲をクラッキングドラゴンに装備する。その効果でクラッキング・ドラゴンの攻撃力を400上げる。」

クラッキングドラゴン

攻撃力3400

バトルフェイズ

「行け!!クラッキング・ドラゴン、ライトロード・ドラゴン グラゴニスに攻撃。重力砲の効果バトルを行うモンスターの能力を無効にする。よってグラゴニスの攻撃力は元に戻り破壊出来る。」

「と、トラップ発動攻撃の無力化攻撃を無効にしてバトルフェイズを強制終了するよ。」

「僕はこれでターンエンド。」

「私のターンドロー私は魔法カードサイクロンを発動重力砲を破壊するわ。」

「私はライトロード・マジシャン ライラを召喚。」

クラッキングドラゴンの効果発動ライラのレベルは4よって相手に800下げて800ダメージを喰らえ。

ライトロード・マジシャン ライラ

攻撃力1700↓900

残りライフ5800↓5000

「ライラの効果ライラを守備表示にしてその伏せカードを破壊するよ。」

「魔法の筒が。」

魔法の筒は割られるそれは当然のことだ。

「これで妨害の可能性は低くなったね。更に魔法カード、月の書を発

動。クラッキング・ドラゴンを裏守備表示にするよ。」

「!!しまった。」

「更に魔法カードソーラー・エクステンジ発動。手札のライトロード・ハンター ライコウを捨てて2枚ドロウしてデッキから2枚墓地に送るよ。」

墓地に送られたカード

ライトロード・レイピア

ライトロード・アーチャー フェリス

「墓地に送られたライトロード・レイピアの効果、このカードがデッキから墓地に送られた時私の場のライトロードモンスターに装備出来る。グラゴニスに装備。更に墓地のライトロードの種類が増えたことよって攻撃力が増加。ジャステイスワールドとライトロードの神域にシャインカウンターが乗るよ。」

ジャステイスワールド

シャインカウンター

5↓6

ライトロードの神域

シャインカウンター

1↓2

グラゴニス攻撃力4400↓5100↓5400↓5500

バトルフェイズ

「グラゴニスでクラッキング・ドラゴンを攻撃!!」

「でもクラッキング・ドラゴンはこのカードのレベル以下のモンスターとの戦闘では破壊されない。しかもクラッキングドラゴンは守備表示だからダメージも無いから無駄だよ。」

「普通ならねでもグラゴニスには守備貫通を持っている。いつけー!!」

「な、なんだって!!」

ライトロード・ドラゴン グラゴニス対クラッキング・ドラゴン

攻撃力5500-0||5500

残りライフ7000↓1500

「ターン終了時デッキの上から3枚を墓地に送る。これによりジャステイスワールドの効果で攻撃力が上がるよ。」

墓地に送られたカード

光の援軍

ライトロード・ハンター ライコウ

カオス・ネクロマンサー

ジャステイスワールド

シャインカウンター

6↓7

「ぼ、僕のターンドロウカードを2枚伏せてターンエンド。」

「私のターンドロウ魔法カードハーピーの羽箭発動。相手の場の魔法罨ゾーンのカードをすべて破壊するね。」

「……………」

バトルフェイズ

「グラゴニスでクラッキング・ドラゴンを攻撃!!」

「……………」

ライフ0

デュエルが終わり、

「ありがとうございました。」

「すごかったですね。特に攻撃力が。」

「ライトロードの殺意が改めてわかったよ。」

「いえいえ、あれでも殺意高くできるよ。今はラッシュデュエル用の為の調整いますからね。」

「え? (あれで調整中なの!?) すごくね。」

「い、いえいえ私なんてまだまだですよ。」

そのまま遊光が来るまでデッキの構成の話が続けていたのだった。

習得せよ儀式召喚!!サイバースマジシャン登場!!

「うーんこれどうしようかな。」

「何のカード見てるのよドラゴン族?」

「いや、これだよ。」

見せてきたのはサイバース・ウィザードが儀式モンスターとなった姿サイバース・マジシャンだ。

「儀式モンスター?」

「ああ、今日の授業で儀式モンスターについての講座があつてその後実際に儀式モンスターをデッキに入れた実技があるつて言うから今日はこれともう一枚儀式モンスターとサイバネット・リチュールを持ってきたんだよ。」

「あーそんな話あつたね。」

「お前まさか忘れたのか?」

「いや、私常にお守り代わりに持ってきているカードがあるから大丈夫。」

「……」

なお、一人だけこの会話になつてから顔が青ざめているのが一人いた。

「あれ、まさか儀式モンスター忘れた?」

「う、うん」

「あれ?じゃあどうすんの?午後の実技だめじゃん。」

「いや、確か購買で儀式確定のパックが売つてたから問題ないと思う。」

「あ、そうなの?良かった。」

なお昼にそのパックをかうとハングリーバーガーとそれに関するカードが入つて軽く絶望した達也なのだつた。

「おーいこれからOCGのカードを使ったデッキ構築の仕方についての講義です。今回は儀式召喚についてだ。儀式召喚は普通、儀式魔法と儀式モンスターそれと儀式素材がないと使うことが出来ない。なのでOCGではあまり使われていないけどラッシュデュエルでは手札のリソースが増えることで使いやすくなってラッシュデュエルでは活躍出来ると考えられている。それを踏まえ手それぞれグループになって考えをまとめろ」

「はーい。」

「サイバース族のデッキだと一応儀式はいるけどあんまりラッシュのルールだと強いとは言えないんだよな。」

「ああ、リンクモンスターのサポートが多いからね。」

「ドラゴンデッキだとレッドアイズ、ブルーアイズ、ギャラクシーアイズ、の戦士版の儀式モンスターとかいるけど普通に入らないんだよな。」

「カオスマAXとか青眼の混沌龍とかは？」

「確かにデッキに入られるけどそれだとドラゴンデッキじゃなくてブルーアイズデッキになってしまいわ。」

「別にドラゴン族デッキに変わりは無いんじゃないか？」

「違うわ!!ドラゴンといってもそれは種族デッキじゃなくてブルーアイズという名前をのデッキよ!!」

「お、おう。」

「どうやら地雷を踏んでしまったようだ。」

「これは話題を変えないと、」

「そ、そう言えば、機械族ってあんまり儀式ってイメージ無いんだけどなんかいんのか?」

「確かに機械族の儀式はあんまりないんだよな。ただ、専用構築にしないといけなくて今使っているデッキとは相性良くないんだよな。」

「話題変えようとしてるんじゃないわよ。」

「(あ、終わった。)」

結局その時間は周りを巻き込み種族デッキとテーマデッキについての論争となり、儀式についての授業をあまりできずに授業が終わっ

た。

「で？結局そっちはどうすんだよ。儀式入れなきゃだろ。」

「とりあえずカオス・フォームと高等儀式術を入れてやってみる。」

「じゃあ俺もサイバースの儀式入れていくわ。」

デッキを軽くいじってそのまま会場に向かうと一人の女子生徒がいた。

「あらあなたが対戦相手かしら。私は柏木 直美（かしわぎ なおみ）よろしく。」

「よろしく。」

「俺のターンドロロー、俺はサイバース・ウィザード、ドラゴネットを召喚。そしてドラゴネットの効果デッキからデジトロンを守備表示で特殊召喚、そしてカードを2枚伏せてターンエンド。」

サイバース・ウィザード

攻撃力1800

ドラゴネット

攻撃力1400

デジトロン

守備力0

「手札から魔法カードエンド・オブ・ザ・ワールドを発動。」
「いきなりぶっ壊れカード来た!!」

「手札の終焉の王デミスを手札からリリースして破滅の女神ルイン儀式召喚時。」

フィールドに現れた魔法陣の中にデミスが入っていき中から美女ルインが現れた。

バトルフェイズ

「ルインでサイバース・マジシャンを攻撃。」

「リバースカードオープン、サイバネット・バックドアを発動。フィールドのサイバース・ウィザードをゲームから除外その後デッキからその攻撃力以下のモンスターを手札に加える。俺はロックアウトガー

ドナーを手札に。そしてサイバース・ウィザードは次の俺のスタンバイフェイズにフィールドに戻ってくる。」

「逃げられましたか。ならルインでドラゴネットを攻撃。」

ドラゴネット破壊。

破滅の女神 ルイン ドラゴネット

攻撃力2300—1400∥900ダメージ

8000—900∥7100

「更にルインの効果でもう一度今度はビットロンを、破壊。」

ビットロン破壊

「更にルインでプレイヤーにダイレクトアタック。」

「俺は手札のロックアウトガードナーの効果発動このカードを攻撃表示特殊召喚して攻撃対象をこのカードに変更する。」

破滅の女神 ルイン 対 ロックアウトガードナー

攻撃力2300—1000∥1300ダメージ

7100—1300∥5800

「そしてこのターンロックアウトガードナーは破壊されない。」

「それでは攻撃することが出来ないわね。ターンエンド。」

「俺のターンドロロー!!スタンバイフェイズ、サイバース・ウィザードが俺の元に戻る。そして俺はライドロンを召喚ライドロンとロックアウトガードナーを生贄にギヤラクシーアイズをアドバンス召喚。」

ギヤラクシーアイズ

攻撃力3000

「!!来ましたかあなたのエースモンスター。」

「カードを3枚伏せてバトル、ギヤラクシーアイズでルインを攻撃。」

「トラップ発動。次元誘爆ギヤラクシーアイズを除外。」

ギヤラクシーアイズの攻撃しようとするそのまま粒子となって消えてしまった。

「俺の切り札が、……まあいい。サイバネット・バックネットの効果で戻ってきたサイバース・ウィザードはこのターン相手プレイヤーに直接攻撃出来るそのまま攻撃。」

「くっ。」

攻撃力1800ダメージ

8000→1800≡6200

「ターンエンド。」

「私のターンドロウ手札からG戦隊シャインブラックを2体召喚。そのまま装備魔法デーモンの斧をルインに装備してバトル。」

G戦隊シャインブラック

攻撃力2000

ルイン

攻撃力2300↓3300

「リバースカードオープン威嚇する咆哮このターン攻撃出来ない。」

「攻撃出来ないとは、……ターンエンド。」

「俺のターンドロウ、俺は伏せてあったサイバネット・リチュアールを発動。フィールドのサイバース・マジシャンと手札のデツコンバードを素材に儀式召喚。電脳世界を守護する魔道士よ、その本来の力を解き放て。いでよ、サイバース・マジシャン!!」

サイバース・ウィザードが進化した姿が現れた。

「更に俺は斬機 アディオンの効果サイバース・マジシャンの攻撃力を1000上げて自身を特殊召喚。」

斬機 アディオン

攻撃 1000

サイバースマジシャン

攻撃力2500 ↓3500

「更に斬機 サブトラの効果相手のルインを対象に発動ルインの攻撃力を1000下げてサブトラを特殊召喚」

斬機 サブトラ

攻撃 1000

破滅の女神 ルイン

攻撃力3300↓2300

「そして斬機2体リリースして手札からスレッショルド・ボークをアドバンス召喚。スレッショルド・ボークの効果で相手の場のモンス

ターの攻撃力は全て500下げる。」

スレッショルド・ボーク

攻撃力2400

破滅の女神 ルイン

攻撃力2300↓1800

G戦隊シャインブラック

攻撃力2000↓1500

2体の斬機を生贄にして、巨大なアンドロイドが現れた。

「バトル、サイバースマジシャンでルインを攻撃。」

サイバース・マジシャン対 破滅の女神 ルイン

攻撃力3500—1800∥1700ダメージ

6400—1700∥4700

「スレッショルド・ボークでシャインブラックで攻撃。」

スレッショルド・ボーク 対 シャインブラック

攻撃力2400—1500∥900ダメージ

4700—900∥3800

「ですか、まだ私のライフは残っています。」

「くっ、ターンエンド。」

「私のターンエンド・オブ・ザ・ワールド発動。手札から破滅の女神ルインを墓地に送り終焉の王 デミスを儀式召喚そうして効果発動ライフを2000払いこのカード以外の場のカード全て破壊する。」

残りライフ1800

終焉の王 デミス

攻撃力2300

先程のルインと同じように儀式召喚でデミスが現れた。

そのままデミスのエネルギーでフィールドを全て破壊した。

「くっ、だけどサイバース・マジシャンの効果このカードが効果でフィールドを離れた時デッキからサイバース族を1枚手札に加える

ことが出来る。俺はサイバース・ウィザードを手札に加える。」

「バトル、デミスでダイレクトアタック。」

終焉の王 デミス

攻撃力2300

2300

「くっ、」

「行きなさいデミスプレイヤーにダイレクトアタック。」

デミス

攻撃力2300

2300のダメージ

4700—2300=2400

「俺のターンドロロー!!来たか、俺は墓地のサイバネット・リチュリアル
の効果墓地のサイバース・マジシャンとこのカードを除外してサイ
バース・トークンを2体特殊召喚!!」

サイバース・トークン

「そして俺は魔法カード、魔法石の軌跡手札を2枚捨ててデッキから
魔法カード1枚を手札に加える俺が手札に加えるのは儀式の下準
備。」

「!!」

「そのまま発動デッキからサイバネット・リチュリアルとを手札にく
わえてそのまま発動フィールドのトークン2体を生贄にを嵐竜の聖
騎士を儀式召喚。更にサイバース・ウィザードを召喚。」

サイバース・ウィザード

攻撃力1800

嵐竜の聖騎士

攻撃力1900

「バトル!!嵐竜の聖騎士で攻撃ダメステ開始時嵐竜の聖騎士の効果発
動。終焉の王 デミスを手札に戻す。」

「なんだって。」

嵐竜の聖騎士が起こした嵐がデミスを襲いデミスが手札に戻った。
「これでモンスターはいない。サイバース・ウィザードでダイレクト
アタック!!」

「参りましたわ。」

残りライフ0

勝者 佐藤 遊光

「負けましたわ。お強いんですね。」

「いや、そういうわけじゃないよ。ただ単に運が良かっただけだよ。
(あつぶねー。やばすぎだろ。デミスドージャー、手札に加わったのが
1枚でも違ったら普通に死んでたぞ。)」

「そうですね。今度は本気でやり合いましょう。」

「……はい。」

知ってたよ。気づいてましたよ。まだあれが残っていることに。
むしろ何で古い方だけであんな強いんだよ。

「ん？あれは一体？」

「え？あれは!!」

別の決闘場でここではクラッキングドラゴンを具材にしたハン
バーガーが現れた。

「行け！ハングリーバーガープレイヤーにダイレクトアタック!!ク
ラッキングバーガー!!」

「ギャアー!!」

ライフ0

「どうだー!!これが僕の実力だー!!」

そこにはひどく荒れた感じの達也がクラッキングバーガー(クラッ
キング・ドラゴン素材にしたハングリーバーガーで相手を倒してい
た。)

「あ、あれが伝説のクッキング流すげえ初めて見た。」

「クラッキングバーガーは飯なのか？それとも機械なのか？」

「それは今は関係なくない。」

「なんかすごいな。」

「そうですね。」

達也が行ったクッキング流風のデュエルに他のデュエリスト達が驚いたのだった。

デュエル・アカデミア 伝説の巨人

「俺はこれでターンエンド。これでフィールドはお前だけ空だ。」

ここは夜の町でデュエルをしている片方のフィールドにはダーク・アームド・ドラゴンがいてもう片方にはフィールドには何も無い

「それはどうかな。俺のターンドロロー!!俺は手札の3枚のカードを使ってこのカードを出す。現われる!!」

謎の男が手札から3体のモンスターが現れたそれらが合体して1体のモンスターになった。

「これは!?まさかマキシマムなのか?」

「行け!!………ダーク・アームド・ドラゴンを攻撃!!」

「う、うわあー!!」

ライフ0

「マキシマムモンスター?」

学校昼休み遊光は達也と京子にデュエル・アカデミアで流行っている噂を、話していた。

「そうなんだよ。噂じゃOCG用のマキシマムカードがすでに流通していてそれを使ってデュエルしている奴がいるらしいんだよ。」

「?ラッシュデュエルだとあるけどOCGのなんて聞いたこと無いし、学校でそう言う話も無いから学校じゃ使えなくない?」

「噂じゃ一部のデュエルディスクで使えるようになってるらしいんだよ。」

「まじか。」

「じゃあ今からカードショップに行って探しに行くか。」

「そうしよう。」

「ちよつと待った。」

二人がカードショップに行こうとしたので掴んだ。

「なんだよ。なんで止めるんだよ。」

「そうだよ。速く行かないと。」

「その前に午後の授業受けないと。」

「あ。」

それからしばらくして放課後。

「よっしゃー!!じゃあマキシマム探しに行くぞ!」

「おう。」

「ちよつと待ちなさいよ。」

「(マキシマム、まさかもう情報が?)」

「あ、柏木さんお疲れ様です。」

「よお、珍しいカードを使ってるのが地下のデュエルルームでデュエルしているぞ。」

「本当ですか。先にそっち見てこようぜ。」

「あ、待ってよ。」

「あれかってあれは!!」

そこにいたのはちよつとデュエルをしていた。

しかしすでに終盤のようだ。

場には巨大なモンスターのような。

「やれ俺の切り札でプレイヤーにダイレクトアタック!!」

「ぎゃあー!!」

ライフ0

「今のつてもしかしてマキシマムモンスターか?」

「まさか。」

「聞いてみよう。」

「やあいま大丈夫かい？」

「!!」

いきなり後ろから話しかけられ後ろを向くと先程まで授業をしていた先生がいた。

「え？何故あなたが？」

「いやー、君達がマキシマムがどうか言っていたのが気になってね。追ってきてしまったんだよ。」

「それで必要がないとは？」

「それはね。「先生早くしませんか？」！ああ。すまない。今行くよ。」

「先生今のは？」

「あれ？あつたことないか？3組の河野 大地（ここの だいち）だよ。今日ここでデュエルする約束をしていたんだよ。」

「あ、そうなんですか。」

「失礼しました。」

そのまま先生が決闘場へと向かって行った。

「遅いですよ。先生。」

「すまない。それでは始めようか。」

「デュエル!!」

先生

ライフ8000

河野

ライフ8000

「私のターンドロー私は、古代の機械兵士（アンティークギアソルジャー）を2体召喚。そして2体をリリースして古代の機械巨人（アンティークギアゴレム）を召喚。カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

古代の機械巨人

攻撃力3000

「あ、古代の機械巨人!!」

「あれってデュエル・アカデミアの教頭以上の先生に使用許可が出ていない伝説のカードじゃねえか。」

現れたのは機械仕掛けの巨人伝説のモンスターの1体だ。

「伝説のモンスターだとしても俺の目的の為に倒してみせる。俺のターンドロロー、カードを1枚伏せて手札から魔法カード手札抹殺お互いの手札を全て捨てて同じ枚数ドロローする。俺は3枚先生は1枚捨ててドロローだ。そして伏せていた魔法カード通常モンスターを2枚手札に加える。俺は墓地にある磁石の戦士a、磁石の戦士bを手札に加える。そして、いでよ俺の切り札。!!」

「!!」

「手札の3枚のマグネットモンスターa. b. yを墓地に送り、現われる磁石の戦士 マグネット・バルキリオン」

磁石の戦士 マグネット・バルキリオン

攻撃力3500

「バルキリオン!」

「マキシマムじゃなかったのか。」

「マキシマム?何の話だ?」

「え。あ、いえ、何でもありません。」

「バトルだ。行け!!バルキリオン古いガラクタをぶつ壊せ。」

バルキリオン 対 古代の機械巨人

攻撃力3500—3000—500

500のダメージ

残りライフ7500

「ターンエンドさあ、先生の切り札は潰した。後はライフを0にするだけだ。」

「それはどうかな。私のターンドロロー魔法カード古代の整備場、墓地の古代の機械巨人を手札に加える。さらにフィールド魔法歯車街(ギアタウン)を発動。このカードがフィールドにあると古代の機械モンスターをアドバンス召喚する際リリースするモンスターを1体少なくできる。更に古代の機械猟犬を召喚。効果で相手に600のダメージを与える。」

機械仕掛けの犬が現れその咆哮をした。

「くっ、融合が出来ないのにそんなカードを入れてるなんて。」

残りライフ7400

「あ、でもバーンダメージ与えられてほとんどリリース素材になるな。古代の機械モンスターだな。」

「そのまま古代の機械猟犬をリリース現われろ古代の機械巨人。更に装備魔法古代の機械戦車を古代の機械巨人に装備。これにより古代の機械巨人の攻撃力を600上げる。」

古代の機械巨人の腕に稼働砲が付き攻撃力が上がった。

古代の機械巨人

攻撃力3000↓3600

「攻撃力がバルゲリオンを超えた!？」

「カードを1枚伏せてバトル、古代の機械巨人でバルゲリオンを攻撃。」

「うわぁー!!」

古代の機械巨人対バルキリオン

攻撃力3600―3500≡100

残りライフ7400―100≡7300

「私はこれでターンエンド。」

「俺のターンドロ、俺は手札から魔法カードマグネット・リバーを発動。墓地のマグネット・バルキリオンを復活させる。」

粉々になっていたマグネット・モンスター

磁石の戦士 マグネット・バルキリオン

攻撃力3500

「あれだけ苦労して倒したバルキリオンが1枚で復活するなんて。」

「更に俺はトラップカード、マグネット・コンバーションを発動墓地から3枚のマグネットモンスターを手札に加え、そのままリリースして現われるマグネットバルキリオンをもう一体特殊召喚。」

「2体目のバルキリオンだと!？」

「だけど攻撃力は古代の機械兵士の方が上だ。」

「更に装備魔法デーモンの斧をマグネット・バルキリオンに装備。」

マグネット・バルキリオン

攻撃力3500↓4500

マグネット・バルキリオンにデーモンの斧が持った。

「バトル、やれマグネット・バルキリオンで古代の機械巨人を攻撃。」

「トラップ発動。競闘 クロス・デイメンション私の場の古代の機械巨人を除外。」

古代の機械巨人の下に穴が空きそのまま落ちていった。

「何!?!」

「先生!!除外してしまうと死にますけど!?!」

「古代の機械巨人がフィールドから離れたことで装備魔法古代の機械戦車が破壊されたことで効果発動。相手に600のダメージを与える。」

「ぐはぁ。」

残りライフ7300—600=6700

「こんな形で勝利を譲ってくれるとはね。やれバルキリオンを攻撃。」
「くっ。」

「トラップ発動古代の機械蘇生、フィールドのモンスターがいない時、墓地の古代の機械兵士を守備表示で蘇生。」

古代の機械兵士

守備力1300

墓地から古代の機械兵士が復活した。

「たとえばこのターン決められなくても次のターンで決めて見せる。バルキリオンで古代の機械兵士を攻撃。」

マグネット・バルキリオン対古代の機械兵士

破壊。

「だからか。」

「私のターンドロウそしてスタンバイフェイズにクロス・デイメンションの効果で私のフィールドに古代の機械巨人が攻撃力倍の状態

で現れる。」

地面に落ちていたアンティークギアゴーレムが2倍の大きさとなって現れた。

古代の機械巨人

攻撃力30000↓6000

「そんなことが。」

「そして私は速攻魔法リミッター解除を発動。場の機械族の攻撃力を2倍にする。これにより古代の機械巨人の攻撃力が更に2倍となる。」

古代の機械巨人

攻撃力60000↓12000

場にいた古代の機械巨人が更に2倍となった。

「攻撃力12000の古代の機械巨人だ!!」

「バトルだ!!古代の機械巨人でマグネットバルキリオンを攻撃。」

古代の機械巨人対マグネット・バルキリオン

攻撃力12000—3450∥8550

残りライフ0

「くっ、くっそー!!強いな古代の機械巨人流石伝説のモンスター。」

「召喚制限はありますが、強力なモンスターですね。」

「やっぱりマキシマムは噂の産物だよな。」

「マキシマムモンスター?どういうことだ?」

「えっとそれは。」

遊光はマキシマムの噂の話をした。

「その噂は聞いたことがあるぞ。上のほうが調整しているらしいという噂だったな。だけど本当の話だとしてもまだまだ実装には時間がかかるみたいだぞ。」

「河野も言っていますし、実際どうなんですか?先生。」

遊光は噂が本当か、どうか先生に確認してみた。

「実は近々マキシマムカードを実装しようと言う話になっているんですよね。あ、これ私に聞いたって誰にも言わないでくださいね。」

「本当ですか?」

「それはもちろん。」

「よし、機械儀式ほぼ無いから来てくれないかなーって期待してたんですよ。」

「何よ。マキシマムといえどドラゴン族もあるんだから期待するわよ。」

「なんだよ。最初のマキシマムはサイバー族使いが使ったんだぞ。つまりこの中じゃ俺が使うね。」

「そんなの分かんないじゃない。」

それから楽しそうにマキシマムについての話に夢中になる遊光達その横でとんでもないことを言っている先生に気づかないのであった。

「そのマキシマムカードがやばいことに盗まれているということは黙っていたほうが良さそうですね。」

弱さは罪!? 奪われたカードを奪還せよ!!

「いやーマキシмумカードは実装されるって話だったけど……全くあの後から音沙汰ないな。」

「まだ調整の最中何じやないの? あれってかなりのパワーを持ってるし。」

「再現されるのに時間がかかるんじゃないのか?」

遊光達いつものカードショップでそんな話をしていた。

「中止になったんじゃないの?」

「さすがにそれは無いだろ。」

「返してよ僕のカード返してよ!!」

「いや、これは俺のカードだ。さっきのデュエルで俺が勝ったんだから俺のものだ。」

「そんなの無茶苦茶だよ。」

中学生ぐらいの子供がヤンキーと言い争っていた。

「今時あんな奴がまだいたのかよ。」

「あれ少しマナー違反だよね。」

達也と京子は無視するきだったのだから一人向かっていったものがあった。

「だったらデュエルで取り返せばいい。」

「!!」

「あ、遊光さん」

「久しぶりだな、リク。」

「あいつ何やってんのよ。」

「ハハハ、さすががていうか知り合いならそりゃあ止めるか。」

「は、誰だかしらねえがいいアイデアじゃねえかそれなら早速俺とデュエルを」

「ちよつと時間をもらえないか?」

「え?なんでだよ。はやくやろうぜ。」

「デツキ診断だよお前だって弱いやつとやっても面白くないだろ。」

「は、おもしろい少し待ってやるよ。今からデュエル場の申請出してくるからそれまでに完成させるよな。」

そう言っ受付に向かっていった。

「あ、あの遊光さん僕あいつに勝てる気がしないんだけど。」

「ああ大丈夫だ、あんな奴お前のあれがあれば一発だろ。」

「あのーそれが、いつものデッキの切り札がーそのー奪われちゃったんですよ。」

「……(マジか)だ、だったら余計にデッキをみなをしてあいつより強くなればいいじゃないか。」

「!!そうだよねそうするよ。」

「俺たちも協力するからさ。」

「おれたち?」

「なんで私たちまで巻き込むのよ」

「まあどうせひまだからいいけどさ。」

「これは?」

「……やっぱりか。こいつらだけか。」

「ええ。」

「ええとこれは、」

「こいつのデッキはHEROデッキなんだよ。」

「なるほどHEROデッキかしかもかなり古いカードが多いな。」

「でもHEROは強力なカードが多い例えばエアーマンはターン規制がないから召喚権が無限にあるラッシュデュエルのルールだとサーチし放題だしな。」

「それをいうなら融合サポートを受けられるんじゃないか?」

「いや古いカードなら名称指定サポートが受けられるんじゃないか。」

そう言っ、デッキを新しくしていった。

「こんなもんだろ。さあてこれで完成だ。勝って来いよ。」

「うん。」

そう言っデュエル場へと向かった。

「返してもらいますよ僕のカード。」

「後悔すんじゃないぞ。」

「デュエル!!」

リク

ライフ8000

ヤンキー

ライフ8000

「僕のターンドロロー僕は手札からフェザーマンとバーストレディを召喚。」

フィールドに現れたのは紅一点(違うけど)の戦士と緑を基調としたHEROが現れた。

E-HERO フェザーマン

攻撃力 1000

E-HERO バーストレディ

攻撃力 1200

「これが僕の懐かしのヒーロー達だ。」

「僕は場の二体のヒーローを生贄に来い!!エッジマン!!」

E-HERO エッジマン

攻撃力 2600

「僕は更にカードを2枚伏せてターンエンド。」

「俺のターンドロローカードはなこう使うんだよ。俺は手札のバルバロス、ガンナードラゴン、sinサイバー・エンド・ドラゴンを捨てて来い、モニタージュ・ドラゴン」

巨大なドラゴンが現れた。

「モニタージュドラゴンはな特殊召喚する時に使ったモンスターのレベル×300攻撃力が上がるよって今の攻撃力は」

「ということはバルバロスがレベル8、ガンナードラゴンがレベル7、

sinサイバー・ドラゴンがレベル10でレベルの合計は」

「25!!」

モニタージュ・ドラゴン

攻撃力7500

「見たか。これが最強のモンスターなんだよ。更に装備魔法、デーモ

ンの斧を装備更に攻撃力を、1000上げる。」

モンタージユドラゴン

攻撃力7500↓8500

「バトル!!モンタージユドラゴンでエッジマンを攻撃!!」

モンタージユドラゴン対エッジマン

攻撃力 8500 | 2300 || 6200

「うわぁー!!」

「俺はこれでターンエンドさっさとあきらめな。」

「僕のターンドロロー僕は魔法カード戦士の生還を発動。墓地のフェザーマンを手札にくわえてそのまま召喚。更にモノマネンドを召喚効果でモンタージユドラゴンと攻撃力を同じにする。」

「何!?!」

ものマネ幻想師

攻撃力0↓8500

バトル

「モノマネンドでモンタージユと相討ち。」

お互い破壊。

「更にフェザーマンでプレイヤーを攻撃。フェザーウインド!!」

「くっ、」

1000のダメージ

残りライフ7000

「俺のターンドロロー俺は魔法カード死者転生手札を1枚捨ててモンタージユを回収する。(これでモンタージユを回収すれば俺の勝ちだ。)」

「カウンターの罠フェザーショットその発動を無効にする。」

「な!!それはフェザーマンがないと使えないとんでもないカウンタートラップじゃねえか。なんでもないかーどじゃねえか。」

「まだ俺はガンナードラゴンを召喚。更にゴースを召喚。更にこの2体をリリースしてバルバロスをアドバンス召喚。」

バルバロス

攻撃力3000

「バトル、バルバロスでフェザーマンを攻撃。」

「トラップ発動ヒーローバリア、攻撃を無効にするよ。」

フェザーマンを守るバリアが張られて攻撃を守った。

「これでターンエンド。」

「僕のターンドロ―僕はHEROバーストレディを召喚。そしてこの2体をリリースして来いネオス!!」

「そして僕はフィールド魔法ネオスペースを発動ネオスの攻撃力を500上げる。更に魔法カードヒートハート攻撃力を更に500上げる。」

「バトルネオスでバルバロスを攻撃!!」

ネオス対バルバロス

攻撃力 3500ー3000＝500

500のダメージ

残りライフ6500

「僕はこれでターンエンド。」

「もう容赦しねえ俺のターンドロ―ギヤハハハこれで俺の勝ちだ。俺は魔法カード死者蘇生を発動!!これで墓地からバルバロスを蘇生。更に手札から青眼の白竜を見せて青眼の亜白竜を特殊召喚。」

先ほどから何度も復活しては消えるバルバロスそして伝説のモンスターの亜種が現れた。

「あいつバルバロス好きだな。」

「その分過労死枠になってきたな。」

「ちよつと邪魔するんじゃないの。」

コストにされたり、普通に出てきたりしたバルバロスの復活にさすがに外野も引いていた。

「だまらしゃい更に魔法カードサイクロンそのセットカードを破壊する。」

「リバースカードオープン威嚇する咆哮このターン攻撃は出来ない」

よ。」

破壊されそうになったカードが直前で発動したことで攻撃することができなくなった。

「だったら青眼の亜白竜の効果発動。攻撃を放棄してネオスを破壊。ターンエンドだ。」

亜白竜の口からエネルギーを放ったことでネオスを破壊された。

「僕は手札からOオーバーソウルを発動墓地のネオスを特殊召喚する。」

バルバロスと同じ

「装備魔法ネオスフォースネオスの攻撃力を800上げる。」

ネオスの拳にエネルギーが溜まっていく。

E H E R O ネオス

攻撃力2500↓3000↓3800

「そして装備魔法　フェバリットヒーローをネオスの攻撃力を守備力分アップさせる」

「な、なんだよそのカードは」

「お前を倒すために店長が用意してくれたんだ。」

「な、なんだよそれ!？」

ネオスにさらにエネルギーが増加した。

ネオス

攻撃力3800↓6300

「こ、攻撃力6300だど!？」

「これがヒーローの力だ。バトル、ネオスで亜白竜を攻撃。」

ネオス対亜白竜

攻撃力6300―3000≡3300

3300のダメージ

残りライフ6500―3300≡3200

「まだ俺のライフは残っているぞ」

残りライフ

「いや、まだまだよ。僕は更にフェバリットヒーローの効果このカー

ドを墓地に送り装備モンスターはもう一度攻撃出来る。もう一度今度はバルバロスだ。」

ネオス

攻撃力6300↓3300

「まだそれでもライフは「手札のオネストの効果発動。」………なんでそのカード入ってんだよ!!」

「ネオスが入ってるんで。」

「それで納得してしまっただろ!!」

ネオスに鳥のような翼が現れネオスの攻撃力がさらに上昇した。

ネオス

攻撃力3300↓5800

ネオス対バルバロス

5800―3000∥2800ダメージ

残りライフ0

「負けた、この俺が、」

「さあお前が今まで奪ってきたカードを持ち主に返してこい。」

「勝者には従う。それが俺のルールだ。ほらよ。」

「ありがとう。それじゃあ僕はこれで。」

カードを返してもらってそのまま帰っていった。

「俺たちも帰ろうか。」

「そうだな。」

「私も帰るわ。」

誰もいないとある薄暗い部屋

「ははは、これで条件は整った。このカードとこれを使ってこれで最強の力が手に入る。」

そこには悪魔のようなカードと戦士のカードと二体が融合したようなカードがそこにはあった。